

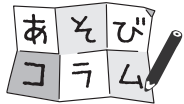
こどもの森の利用案内

- ★ こどもの森は、時間中いつ来ていつ帰ってもOK。お金はかかりません。
- ★ こどもの森にある道具は自由に使えます。使い終わったら片づけてね。
- ★ おやつやお弁当を食べることもできます。ごみは持って帰ってね。
- ★ 汚れてもいい服や靴で来てね。着替えもあるといいよ。
- ★ なくなったら困る大事なものは、おうちにおいてくるか身に付けて遊んでね。



大人のみなさんへ

こどもの森から保護者のみなさんへのお便りです



本気？ ホラ吹き？ 子どもの語る「事実」

幼児期の子どもは、「事実」の認識がどうも大人とは違うようです。例えば、「お手伝いできた！」と鼻高々だけど、実際にはお母さんの手間が倍増している、とかね（笑）。この頃の子どもは、自分の感じた事がそのまま事実だと思っているのです。

物事の認識の仕方も成長していく

成長するに従い様々な体験も増えて、徐々に客観的な視点を得ていきますが、その切り替わりは小学生時代と言われていきます。

しかしその時期には個人差があるため、小学校の中学年頃は、何が「事実」かを巡って友達同士の摩擦が起こりやすかったりします。「自己チュー」や「嘘つき」と非難されたり、ちょっと大げさな表現について腹を立ててしまったり。

ときには大人もホラを吹く！

ある日のこどもの森。小学生ふたりのやりとり。

Aくん「おれ、泥だご投げて飛んでるカラスに当たったことある！」

Bくん「嘘つくなよ！そんなのできるわけないだろ」

Aくんは嘘とも本気ともつかない表情。BくんはAくんの言うことがどうにも許せない様子。

大人としては、そんなこともあるかもねーとも思うし、「嘘だろう」と思う気持ちもわかる。でもふたりの間には険悪な雰囲気漂い始めて……。そこで。

「カラスなんて簡単だぜ！ おれはヒコーキに当たったことあるぞわはは」

Aくん「それはないわー！」

Bくん「バッカじゃないの？」

ふたりは大笑いして、また一緒に遊び始めました。

感じ方とか、受け止め方とか、どの子も発達途上。遊んでいるうちに少しずつ相手を理解して、自分も軌道修正して、そうやって成長していく力が、子どもたちにはあります。そばにいたプレーリーダーは、時に子ども以上の大ボラ吹きになりながら、その力を信じて見守っていきたくと思っています。



遊びながら学ぶ、 子ども同士の“作法”

「タッチ！」

「オメーは入ってねーだろ！」

勝手に鬼ごっこに入ってきた年長児に、小学4年生が大きな声で言った。

ドキリとして振り返る。が、小さい子はあっけらかんと、

「入ーれーて！」

「あ、うん、いいよ」

いいよの“よ”を言い終わる前に、2人は一緒に走り出した。初対面の子も含めた子どもたちが異年齢で遊んでいる、というのはこどもの森では珍しい光景ではない。小学生にもさらに“お兄ちゃん・お姉ちゃん”がいるし、年長児が“お兄ちゃん・お姉ちゃん”になることもある。

異年齢の子どもの遊びを見ていると、ヒヤヒヤするシーンがよくある。特に、ふたり姉妹の家庭に育った新人プレーリーダーの私は、男子の激しい言葉や行動にびっくりして、思わず“大人の基準”で介入しそうになる。

「入れて」や「いいよ」がスツと言える子ばかりじゃない。「入れてあげたら？」って、大人がお兄ちゃん・お姉ちゃんに言えば、きっと仲間に入れてはくれる。

でも、大人が何も言わずとも、子どもはちゃんと“子ども同士の作法”を学ぶのだ、と教えられることは多い。うまく遊びに加われなかったり、泣かせちゃって気まづくなることもある。大人からすれば“失敗”に見えるけれど、それも大事な経験なのではないだろうか。

このときだって小学生たちは、年長児がジャンケンに負けても、彼ひとりだけを鬼にすることはしなかった。誰も何も教えていない。でも彼らは、その方がみんな楽しく遊べるのだと知っている。もちろん年長児はそんな配慮などつゆ知らず、最後までキャッキャッと走り回っていたのだけれど。遊びながら学ぶとは、きつこういことなのだろう。



こどもの森は、身近な自然のなか、子どもたちの発想で自由に遊べる緑地です。何をして、どうやって遊ぶか？を、子ども自身が決められるよう、なるべく手や口を出さずに見守ってあげてくださいね。心配なこと、わからないことは、プレーリーダーにどうぞ声をかけてください。